

琉球大学学術リポジトリ

[研究ノート]

渡名喜島における中学校地理的分野「身近な地域の調査」の授業実践：

地図の有効的な活用と言語活動を例として (特集 地理教育)

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): 渡名喜島, 身近な地域の調査, 授業実践, 地図の有効的な活用, 言語活動, Tonaki Island キーワード (En): geographical study of local environment, lesson report, Effective use of maps, discussion activities 作成者: 中村, 謙太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017666

渡名喜島における中学校地理的分野「身近な地域の調査」の授業実践 — 地図の有効的な活用と言語活動を例として —

中 村 謙 太

(八重瀬町立東風平中学校)

Lesson Report of Junior High School's Geographical Study of Tonaki Island's Local Environment

— Effective Use of Maps and Discussion Activities —

Kenta NAKAMURA

(Kochinda Junior High School)

摘 要

本稿は、沖縄県渡名喜村立渡名喜中学校1年生が渡名喜島をフィールドに展開した中学校地理的分野「身近な地域の調査」の授業実践である。本単元のねらいである「生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、地域的特色をとらえる視点や方法を身につけさせる」ために、地図の有効的な活用と言語活動を意識した学習を展開した。具体的には、単元の前半を技能習得の段階とし、地形図の読図支援やフィールドワークの技能などを丁寧に指導した。後半は生徒一人で1つの調査テーマを設定し、課題追究型の学習を展開した。生徒の調査には、各家のソーンジャキ（ヒンプン）の種類を調査、分布図を作成し、地域性を考察したものや、集落景観を構成するフクギの分布状況を調査し、フクギの大きさなどから集落の発生のようすを推論するなどの事例がみられた。検証の結果、地図の有効的な活用と言語活動を意識した学習は、本単元の学習において効果的に作用した。

キーワード：渡名喜島，身近な地域の調査，授業実践，地図の有効的な活用，言語活動

Key Words: Tonaki Island, geographical study of local environment, lesson report, Effective use of maps, discussion activities

1. はじめに

1. 本授業実践の意義

本稿は、渡名喜村立渡名喜中学校1年生が渡名喜島をフィールドにおこなった中学校社会科地理的分野「身近な地域の調査」の授業実践である。この単元のねらいは、「観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、地域的特色をとらえる視点や方法を身につけさせる」(文科省『中学校学習指導要領』2008)ことにある。つねに情報が更新され、手に入る膨大な情報を取捨選択しながら、変化の激しい社会を生活している現代人には、地球的な視野を持ち、日々変化する日常を主体的に認識し、自ら考え、自分の力でしっかりと生きていく力「生きる力」が強く求められている。

このような社会にあつて「身近な地域の調査」の単元を学ぶ意義は大きい。なぜなら、自分がどこに立っているのか、どこに根ざして生活しているのかということを確認することなしには、十分な思考や思慮深い判断はできないと考えるからである。生徒は、身近な地域の学習を通して、自分たちが生活している地域の新たな側面を発見したり、自分の知っている地域情報の断片を再構成しながら、郷土への思い、愛着を育て、地域に主体的に生きていこうとする姿勢を習得できる。この単元で培う身近な地域への理解と関心、愛着や誇りが、生徒たちの自信や自己肯定感を生み出し、変化の激しい国際社会の中でも、自分を見失うことなくしっかりと生きていく力になると考える。

このことに関連して我那覇(2003, p.112)は、「地理教育において[生きる力]を育てるということは、

具体的な地理的事象を取り上げて児童生徒に地理的なものの見方・考え方を身につけさせることにある」と指摘している。実際に野外に出かけ、「どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか」を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえたり、「なぜこのように広がっているのか」というその事象が成り立つ背景や要因を追究し、考察していくこの単元は、「地理的な見方や考え方」の基礎を培い、社会的な事象をさまざまな角度から考え、判断していく「社会科の思考力・判断力」を育てる学習においても重要な役割を担っている単元であるといえる。

一方で「土地と人々とのかかわり」を科学する地理学においても地域調査（フィールドワーク）は、もともと基本的かつ重要な技能である。「身近な地域」という子どもたちが最も親しんでいる地域をフィールドに設定し、自分が生活している土地への関心を高めながら、この地理の技能を習得していくことにもこの単元の大切なねらいがある。そうすることで人口、面積などといった表面的な地理の記述にとどまらない、深みのある学習ができると確信している。

2. 授業構想の視点

以上のことを踏まえ本実践では、単元のねらいを達成するために、次の二つの視点を特に意識して構想を練り、授業実践を行った。

一つは「地図の有効的な活用」である。地理の学習において、地図活用の技能は非常に大切である。中学校学習指導要領（2008）においても内容の取り扱いで、「縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用の技能を高めるようにする」ことが示されている。西岡（2006, p.97）は、「地図にはそこに暮らす人々の[物語（ストーリー）]がある」と述べ、「無味乾燥な知識の羅列」で終わることのない、楽しい地図学習の必要性を説いている。本実践にあたり、2万5千分の1地形図の読図支援を工夫したり、調査した項目を地図にまとめ、オリジナルの主題図を楽しく作成するなど、地図を有効的に活用することで、生徒たちの身近な地域への理解と関心を高め、単元のねらいを達成したい。

二つ目は学習活動についてである。中学校学習指導要領解説社会科編（2008）では、今回の指導要領の改訂の要点として基礎的・基本的な知識、概念の習得を重視する観点や社会参画、様々な伝統や文化、宗教に関する学習などを重視する観点とともに「言語活動の充実」をあげている。また同指導要領の「内容の取り扱い」では、観察や調査の結果をまとめる際に「自分

の解釈を加えて論述したり、意見交換するなどの学習活動を充実」させることが明記されている。地域住民への聞き取り調査や、生徒同士がお互いの調査内容について意見交換する場面を設定するなど言語活動を意識した学習活動を展開することで、思考力、判断力、表現力等を養うとともに、生徒たちの身近な地域への理解と関心を高め、学習内容の確かな理解と定着を図ることを目指したい。本授業の視点を明確にするために、次の授業仮説を設定する。

授業仮説

「身近な地域の調査」において、地図の有効的な活用を図り、言語活動を意識した学習活動を展開することで、生徒が生活している土地に対する理解と関心が深まり、地域的特色をとらえる視点や方法が身につくであろう。

3. 渡名喜島、渡名喜幼小中学校の概要

1) 渡名喜島について

渡名喜島は、那覇市の北西約58 kmにある周囲約12.5 km、面積3.4 km²ほどの島である（図1）。発達した珊瑚礁原に囲まれ、カルスト地形特有の変化に富んだ島嶼景観を有している。1997年に沖縄県立自然公園の指定を受けた。沖縄本島との交通は、空路はなく、渡名喜島を経由する那覇市泊ふ頭と久米島間を結ぶ定期船（フェリー）が1日1便あり、島外との主な交通手段となっている。集落は、南北の丘陵間に挟まれた砂地に立地している。島民の手により、白い砂道やフクギ並木、路面より低い赤瓦の家々など沖縄の伝統的な集落景観が保たれており（図2）、2000年の5月に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。渡名喜村は、2005年現在で、人口464人、世帯数は219戸である（渡名喜村役場ホームページより）。65歳以上のお年寄りが人口の約40%を占めるなど、高齢化が進んでいる。漁業と農業が村の重要な基幹産業で、もちきびと島人参が主要生産物である。伝統行事も盛んで、海神祭でのハーリー船競争や、旧暦6月に行われるカシキーなどは、島民総出で行われる。渡名喜島が舞台となり撮影された映画、『群青』が2009年に公開された。

2) 渡名喜幼小中学校について

渡名喜幼小中学校は、幼児4名、小学生14名、中学生15名¹⁾が学ぶ幼小中併置の小規模校である（図3）。渡名喜幼小中学校（2010）が発行した『1年の歩み（足跡第34号）』によると、小学校は明治22年3

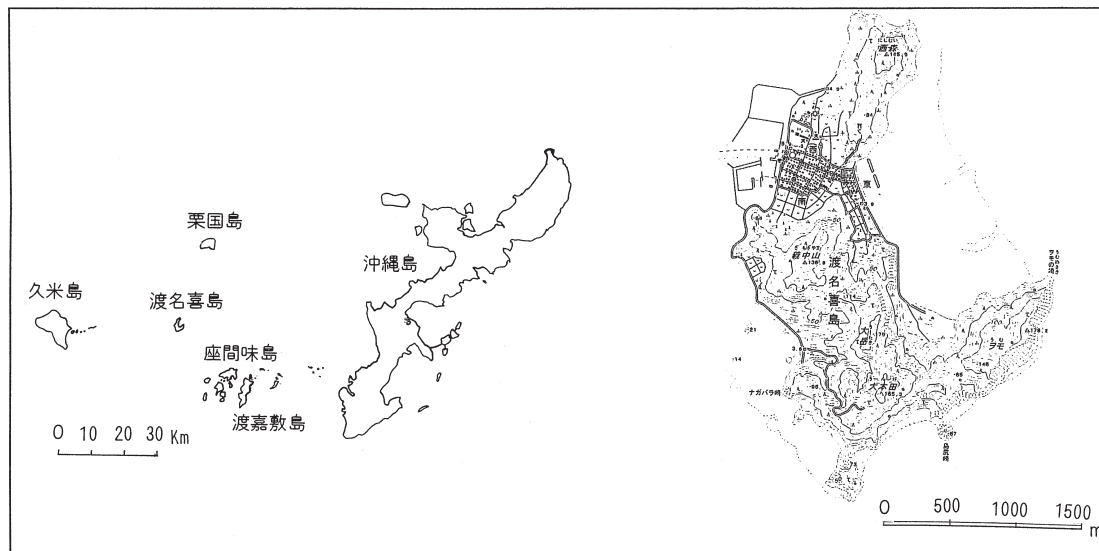


図1 渡名喜島の位置と渡名喜島（1：25000 地形図「渡名喜島」平成16年更新を縮小）



図2 渡名喜島の集落景観（2007年筆者撮影）



図3 渡名喜幼小中学校（2007年筆者撮影）

月1日創立，中学校は昭和23年4月1日創立で，それぞれ120周年と60周年を迎えた．過疎化の影響で，児童生徒数は年々減少傾向にあるが，保護者や地域の人々は「子どもは島の宝」と考え，学校行事等に積極的に参加し，協力的である．島の豊かな海での追い込み漁やリーフ釣り，潮干狩り等を体験する自然体験学習や，今年で91回を数える水上運動会，大正時代から継続して伝統的に行われている「朝起き会」²⁾などの行事が現在も続いていて，地域に根ざした，特色ある学校教育が展開されている．

今回授業実践を行った中学1年生は，全生徒が7名の単式学級である．意欲的に社会科の学習に取り組むことができ，授業における発言も多い．お互いよく話し合い，学び合う協同的な姿勢も身につけている．学級の良さを生かしながら，授業を構想し，実践していきたい．

II 授業の構想

1. 指導計画

単元のねらいである「生徒が生活している土地に対する理解と関心が深まり，地域的特色をとらえる視点や方法が身につく」ことが達成できるように，次のような単元の指導計画を立てた（表1）．全12時間の計画の前半を「技能習得の段階」とし，航空写真の読み方，地形図の読み方，フィールドワークの基礎的な技能などを丁寧に指導し，しっかりと習得させることを目標とした．単元の後半は，「課題追究の段階」とし，生徒個人で1つの調査研究テーマを設定し，フィールドワークを通して追究していく実践をおこなった．少人数での演習形式を採用し，自分の調査テーマや調査の進行状況などを説明したり，お互いに意見交換する場面を設定するなど，言語活動を意識した学習計画を設定した³⁾．毎時間の授業で生徒たちに身につけてほしい力を評価規準として設定し，達成目標とした．

表1 「身近な地域の調査」 単元指導計画

過程	学習内容	本授業実践での工夫点 【地図の有効的な活用】 【言語活動を意識する】	評価規準	
技能習得の段階	1時間目 ◇単元のオリエンテーション ・身近な地域の地図を描く ・身近な地域を調査する手順について学ぶ ・フィールドノートを作成する	【地図活用】 ・手書き地図 ・フィールドノートに地形図の読み方や利用方法等を記し、地図活用のノウハウがいつでも調べられるようにする	【言語活動】 ・自分で描いた手書き地図を説明する ・航空写真や地形図を見て、気づいたことやわかかったこと等の意見を出し合う	【関心意欲】生徒が住んでいる地域に対する関心が高まっている
	2時間目 □航空写真から地域をみる ・現在の渡名喜島の航空写真を読みとる			【技能表現】景観写真や航空写真の読みとりの技能を習得している
	3時間目 □2万5千分の1の地形図の読みとる ・渡名喜の地形図を読みとる。 ・縮尺・地図記号・等高線について学ぶ			【技能表現】地図の読みとるや作図の技能を習得している
	4時間目 ◇地形図を確かめる調査の実施 ※校外 ・渡名喜の2万5千分の1の地形図上の表記が、実際にどのような景観をなしているか、野外に出て実地調査をおこなう	【地図活用】 ・生徒たちの日常体験（現実の空間）と結びつけた地図理解を目指す ・地図情報の現地確認 ・実際に2万5千分の1の地形図を活用した野外調査の実施	【技能表現】フィールドワーク、聞き取り調査などの地理的スキルを習得している	【技能表現】フィールドワーク、聞き取り調査などの地理的スキルを習得している
	5時間目 ◇集落の野外調査実施 ※校外 ・渡名喜集落の野外調査を実施し、観察のポイントや、方法などを実践を通して学ぶ			【技能表現】フィールドワーク、聞き取り調査などの地理的スキルを習得している
課題追究の段階	6時間目 つかむ □『私たちの渡名喜MAP』を作成 ・個人が知っている場所に関する情報を付箋紙に書き、一つの地図にまとめて共有化を図る	【地図活用】 ・1枚の地形図に、場所の情報をみんなで記すことで地域情報を共有化する 【言語活動】 ・調査したことを地図の中にメモできるように、指導する ・縮尺の違う集落の地図を何種類か用意し、自分の調査に合わせて選択、活用できるようにする ・中間報告会や最終の報告では、調査したことを地図にまとめ、発表する形式を採る（1枚の主題図を作成する）	【言語活動】 ・少人数による演習形式を採用し、一人1研究を進めることで、自分の調査テーマや調査の進行状況を随時説明したり、お互い意見交換する場面を設定する ・中間報告会を設定し、調査の状況等を説明した上で、地域の方も交えた意見交換・意見の練り合いの場を設定する	【関心意欲】生徒が住んでいる地域に対する関心が高まっている
	7時間目 □地域調査のテーマ設定・調査計画作成 ・地域調査の学習課題（テーマ）を一人1つ設定する ・調査計画書を作成する			【思考判断】身近な地域の諸事象から地理的事象として見いだしている
	8時間目 追 □地域調査1 ※校外 調査計画書に基づき、聞き取り調査や文献調査を実施する			【技能表現】フィールドワーク、聞き取り調査などの地理的スキルを習得している
	9時間目 □地域調査2 これまで調査してきたことをまとめ、中間報告の準備をおこなう。または補足調査を実施する			【思考判断】身近な地域の諸事象から地理的事象として見いだしている
	10時間目 深める □地域調査3（中間報告会） これまでの調査の中間報告をおこなう。地域の人も交えた質疑応答や意見交換の中で、今後の調査の方向性を全体で練り合い、確認していく			【思考判断】地域の環境条件や人間の営みに着目して、多面的・多角的に考察している
	11時間目 広げる □地域調査4 中間報告会を受けて、補足的に調査をおこない、調査したことをまとめる。必要に応じてグラフや統計地図を活用			【技能表現】追究し考察した過程や結果を地図化しまとめることができる
	12時間目 □地域調査のまとめ ・各調査を振り返る ・各調査から見えてきた渡名喜集落について、その特色をとらえる			【知識理解】市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法を理解し、その知識を身につけている



図4 中学1年生が描いた「身近な地域」の手描き地図(2008年)

2. 本授業実践での工夫点

本授業実践で特に意識した工夫点は、「地図の有効的な活用」と「言語活動を意識した学習活動」である。この2つを授業構想の大事な視点として採用する理由は先に述べたが、具体的な実践内容の計画を学習内容や評価規準と合わせて表1に記載した。

Ⅲ 授業の実際

1. 技能習得の段階

1) 身近な地域の地図を描く(1時間目)

単元の導入として、生徒たちの「身近な地域」の範囲を把握するために、身近な地域の手描き地図を作成する授業をおこなった。ほぼ全員が自分の家から学校までの道のりを中心に描いていた(図4)。「身近な地域」とは、自分の家や友達の家、よく通う商店などがある、この渡名喜集落であることを確認した。自分が見慣れている場所の情報を思い起こし、手描き地図に記す作業をとおして、場所(身近な地域)に対する関心を高めることができた。

また、フィールドノートを一人1冊作成し、単元で学んだことをすべてこのノートに記すように指導した(図5)。ノートには、調査で得た情報や個人で進めていく調査・研究のアイディアの蓄積だけでなく、地域調査の手順や方法、地形図の読み方や利用方法等を載せ、地域調査のノウハウ⁴⁾がいつでも調べられ、振り返ることができるようにした。そうすることで単元の後半でおこなう「課題追究の段階」でも、生徒が自分で調査を進めていけるように工夫した。なお、表紙の写真は生徒本人が撮影した渡名喜集落の景観写真を貼ることで、地域調査への関心を高めることができた。



図5 活用したフィールドノート(2008年)



図6 航空写真から地域をみる授業(2008年)

2) 航空写真から地域をみる(2時間目)

渡名喜島の航空写真を活用し、航空写真からわかること、気づいたことを生徒たちに発表させながら地域を概観した(図6)。生徒からは「島の大部分は緑である」「北と南に高い山がある」「集落は南北の山の間にある」「珊瑚礁が広がっている」「島の南側には珊瑚があまり広がっていない」など多くの意見が出された。授業の後半は集落上空の写真を活用し、学校や役場、郵便局等の主な建物の場所の確認や土地利用についての読み取りをおこなった。航空写真ではわからない「この畑には何が植えられているのだろうか」とか「島の緑はどのような木が生い茂っているのか、あるいは草原なのか確かめたい」という課題も生徒たちの中から聞こえてきた。

3) 2万5千分の1の地形図を読む(3時間目)

国土地理院発行の渡名喜島の2万5千分の1地形図を一人1枚配布し、縮尺や等高線、地図記号などの見



図7 授業で活用した2万5千分の1の地形図
(2008年生徒のフィールドノートより)

方を指導しながら、読図支援をおこなった。畑地や海拔高度50メートル以上の土地に着色したり、学校や役場、自分の家等に目印をつけたりする作業をとおして、読図の技能が身につくよう支援した(図7)。

次に地形図に描かれた地図記号をすべて書き出し、確認をした(図8)。その際、「身近な地域」が生徒たちの直接経験地域であることを生かし、「日常体験と結びつけた学び」ができるように心がけた。「ここに灯台があったよね」「学校裏のビニルハウスは去年の台風でなくなったよ」など地図に表現されているもの(こと)をリアルな空間のイメージに置き換える作業を丁寧にすることで、生徒たちの楽しく積極的な学びの姿勢がみられただけでなく、読図の技能を高め、地域理解も深まったと考える。生徒からは「針葉樹林と広葉樹林は何が違うの」「電子基準点って何?」「岩がけてどうなっているの」などの疑問が出され、次の学習へつながった。

4) 地形図を確かめる調査の実施(4時間目)

「前時の疑問を解決する」というねらいで、渡名喜の2万5千分の1地形図上の表記が、実際にどのような景観をなしているか、地形図を持ち野外に出るの調査を実施した。電子基準点や三角点を確認したり、針葉樹林や広葉樹林の広がり、岩がけの実際、畑地の土地のようすなどを観察し、学ぶことができた。



図8 地形図に描かれた地図記号を書き出す

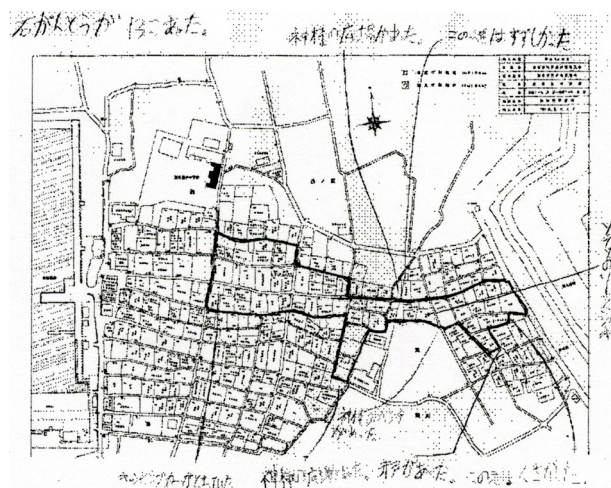


図9 野外調査のルートマップ(生徒のフィールドノートから)

5) 集落の野外調査実施(5時間目)

〔技能習得の段階〕の最後に、野外調査の基礎的技術の習得のために全員でフィールドワークを実施した。1時間の中で観察・記録などの技能が指導できるルートを選定し、実施した。フィールドワークでは随所で立ち止まり、今いる地点を地図で確認したり、あらかじめ決めておいた観察ポイントでは、観察した事項をフィールドノートに書き込む練習をおこなった(図9)(図10)。観察の視点や記録すべき情報等を適宜指導した。ムラウチにある古いカー(井戸)の観察では、井戸の横にお金が置かれていることを発見し、「この井戸は神様を祭っている」とコメントした生徒もいた。

2. 課題追究の段階

1) 『私たちの渡名喜MAP』を作成(6時間目)

一人1研究テーマを持ち、課題追究を進めていく〔課題追究の段階〕の導入にあたり、『私たちの渡名喜

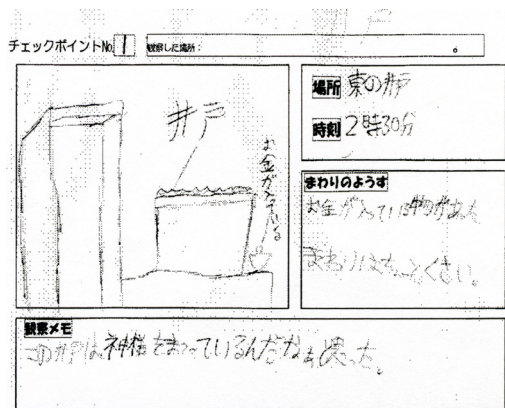


図10 中学1年生の野外調査の観察記録
(生徒のフィールドノートから)



図11 『私たちの渡名喜MAP』(2008年生徒が作成)

表2 生徒の調査・研究テーマとその概要

生徒	調査・研究テーマ	調査・研究の概要
A	集落内のフクギの分布について	渡名喜集落の景観の特徴の一つであるフクギに注目し、フクギがどのくらい屋敷林として分布しているのかをフィールドワークにより調べ、地図に表現した。大きなフクギが集中している場所を見つけ、そこが「集落の発生場所ではないか」と推測し、フクギ以外でその根拠となるものをムラの古老へインタビューするなどして調査し始めた。
B	渡名喜のソーンジャキ(ヒンブン)の種類別分布状況	ソーンジャキの種類が多様であることに気づき、どんなものが、どのように広がっているのか、フィールドワークにより調べ、分布図を作成した。その結果、植物(鉢植えも含めて)や珊瑚の石、ブロックなどさまざまな種類があることがわかった。その分布には地域による偏りが若干みられた、と報告した(図12参照)。
C	東区における道より低い家の分布	渡名喜の集落の伝統的な特徴である「道より低い家」の分布をフィールドワークにより調べ、分布図にまとめた。なぜ低いのか、低くて困ることはないか、など家の人にインタビューし、考察した。
D	渡名喜の石敢當の種類と分布状況	渡名喜集落内の石敢當すべてを調査対象とし、その種類と分布状況をフィールドワークにより調べ、地図に表現した。写真を撮り、さまざまな種類の石敢當を提示することができた。
E	「涼しく感じる場所」の研究	集落内の「涼しく感じる場所」をフィールドワークにより探し、地図にまとめた。そこは木陰や風の通り道になることが多く、時間帯によっては集落のお年寄りが集まる憩いの場となることが報告された。
F	渡名喜集落のシーサーについて	自分の家の周辺地域のシーサーに着目し、シーサーのようす、分布状況を1枚の地図にまとめた。写真を撮り、さまざまな種類のシーサーを提示することができた。
G	音とにおいの研究	集落内を歩いて、特別な音やにおいに着目し、それを地図に表現することを試みた。平面空間での調査は難しいことがわかり、集落の一つの道に限定して音やにおいを地図の中に文章等で表現した。

(生徒のフィールドノート、中間報告会から作成)

MAP』を作成した(図11)。これは生徒個人個人が持っている場所に関する情報を付箋紙に書き、1枚の地図に貼ることで、地図を介してその情報を全員で共有化することが目的である。そうすることで今まで見えなかったものが見えてきたり、生徒の進める調査研究の課題設定につながりやすいと考えた。生徒の出し合った情報には「ここには拝所があって、よく拝まれている」「ここはよくお年寄りが夕涼みをしている」「ここから見える景色は最高」などがあつた。この『私たちの渡名喜MAP』の情報は、生徒各人が課題追究をしていく上でたいへん効果的に活用された。

2) 調査テーマの設定・調査計画書(7時間目)

生徒一人につき1つの調査・研究テーマを生徒自ら設定した。各生徒が設定した調査・研究テーマと調査の概要をまとめたのが表2である。テーマのほとんどは、航空写真を読んだり、地形図を読んだり、フィールドワークや『私たちの渡名喜MAP』を作る作業の中で、生徒同士の中から出てきた疑問や好奇心がベースになっている。その疑問をいつ、どのように調べるのか、手段と方法を計画した「調査計画書」も各人で作成した。

表3 「身近な地域の調査」中間報告会（10時間目）指導計画

学級	中学1年（地理）	授業場所	中学1年教室	授業者名	中村 謙太
題材名	身近な地域の調査		※探究学習		
本時のねらい	<p>【「探究」学習への支援】</p> <p>①お互いの調査の状況を報告しあい、意見交換したり、アドバイスをしあうことを通して、設定した課題について考察を深め、思考力判断力を高める。</p> <p>②地域を調査、追究した経過や考察の結果を相手にわかりやすく表現できる。</p>				
本時の基礎・基本	<p>○調査について主体的に意見交換をする中で、調査地域について多面的・多角的に考察することができる。</p> <p>○地域を調査、追究した経過や考察の結果を相手にわかりやすく表現できる。</p>				
【授業の流れ】					
	学習内容		指導上の工夫点	準備するもの	
	■活動 ◇教師の発問や指示、予想される生徒の反応				
導入	<p>■これまでの学習の過程をふりかえる</p> <p>■今日の目標を確認する</p>				
	<p>①これまで調査してきたことをわかりやすく報告しよう。</p> <p>②報告を聞いて、調査の進め方やまとめ方についてアドバイスしよう。</p>				
展開	<p>◇意見交換やアドバイスについての視点を提示する</p>		意見交換視点を明示する	視点カード	
	<p>■調査の発表（一人1研究で発表する）</p> <p>◇「〇〇さんからお願いします。」（一人ずつ発表）</p> <p>【調査内容】</p> <p>○福木の分布 ○ソソヅヤキの種類別分布 ○石取當の分布</p> <p>○「涼しく感じる場所」 ○道路より低い家の分布</p> <p>○シーサーについて ○においの分布について</p> <p>■意見交換・質疑応答（地域の方も交えて）</p> <p>◇「今の発表を聞いて、アドバイスや意見などはありませんか。」</p> <p>・〇〇を調べるともっとよい調査になる</p> <p>・〇〇を調べたことがとてもいい視点だと思いました</p> <p>◇「健徳さん、美智子さん、進さんからのご意見ありませんか。」</p> <p>【本時の授業に参加する地域の方々】</p> <p>○上原健徳さん（渡名喜村在住）</p> <p>○仲里美智子さん（渡名喜村在住）</p> <p>○上原進さん（渡名喜村在住）</p>		<p>→教師は各発表に対して評価をおこなう。調査の進め方やまとめ方など良くてきたところを褒める。また各人の調査経過等について補足的に説明をおこなう。</p> <p>→教師は各意見や質疑について評価をおこなう。多面的・多角的にとらえた意見が出てきたら褒める。各人の調査の方向性について適切にコメントする。</p> <p>→地域の方々とは、意見を述べる視点等について事前に打ち合わせをしておく。</p>	発表資料 調査地図	
整理	<p>■お互いの中間報告を聞いて、他の人の調査方法について良かったところや自分も取り入れてみたいところ、また地域の方からのアドバイスを聞いて学んだことなどをまとめる</p>		本時の全体の評価をおこなう、次時につなげる	フィールドノート	
今日の授業で、基礎基本を身につけさせるために工夫したこと		<p>(1) お互いの調査内容について報告し、意見を言い合う場面を設定することで、「生徒同士の学び合い」の中から主体的に探究学習を深めていく。</p> <p>(2) 学び合いを深める視点（今回の授業では「質疑応答の仕方やアドバイスの方法」）を提示する。</p> <p>(3) 地域の方々に授業に参画してもらい、生徒の学びを深める。（地域人材の活用）</p>			
本時におこなう評価（思考・判断）		お互いの調査内容を理解しあい、意見交換をする中で、地域の環境条件や人間の営みに着目して、調査地域について多面的・多角的に考察することができたか。			

3) 調査実施 (8 時間目・9 時間目)

生徒が作成した「調査計画書」に基づき各個人で調査を進めた。調査の視点やポイントなどは事前に教師と打ち合わせをしてから、フィールドに出る方法を採った。また、何名か一緒に活動しお互いの調査に協力する場面もあった。調査したことは必ずフィールドノートに記載するよう指導した。

各個人で調査を進める一方で、教室では少人数による演習形式で授業を進めた。調査してきたことを学級に持ち帰り、お互いで報告し合い、調査の方向性や進め方についてのアドバイスをもらう時間を設定した。調査がどの程度進んでいるのか、今の時点でわかっていることなどをフィールドノートや地図を介して説明したり、そのことについてお互いで意見交換をすることで、一つの調査にさまざまな視点を取り入れ、より深みのある地域調査を展開することができた。意見交換の中では、友達のテーマについて情報提供がなされる場面もあった。

4) 中間報告会 (10 時間目)

お互いが進めている調査について、すでにわかっていることや調査の進行状況等を報告し合い、それについて意見交換したり、アドバイスをし合うことを通して、設定した課題を多面的、多角的に考察していくことを目的に、中間報告会を実施した(表3)。報告会では、自分の調査状況や調査内容について相手にわかりやすく理解してもらう必要がある。そのため調査したことを1枚の地図にまとめ(主題図を作成)、それをベースに自分の言葉で説明する(発表する)形式を採った。

生徒が作成した主題図が図13や図14である。どの調査も、ソーンジャキや石敢當、フクギ、道より低い家、涼しい場所などの地理的な事象が「どこに、どのように広がっているのか」を位置や空間的な広がりとかかわり度とらえたり、「なぜこのように広がっているのか」というその事象が成り立つ背景や要因を追究し、考察する内容となっていた(表2を参照)。

中間報告会では、その意見交換が生徒の間だけで終わらないよう、3名の渡名喜島の方々⁵⁾をお招きし、地域の方も交えた意見交換・意見の練り合いをおこなうことができた。地域の方からは、調査テーマに関わる「昔の渡名喜島のようす」や情報提供が多く寄せられた。また、自分たちの地域を知ろうとしている姿勢や、調査の視点のするどさ、フィールドワークの緻密さ等に対するお褒めの言葉をたくさんいただいた。中間報告会を終えての生徒たちは、自分たちの調査を褒めてもらった喜びと、調査を積み重ねてきたという自



図12 生徒が調査した渡名喜島のさまざまな種類のソーンジャキ (2008年)



図13 生徒がまとめた渡名喜島の石敢當の種類と分布状況 (2008年生徒作成)



図14 生徒がまとめた渡名喜島の「涼しい場所MAP」 (2008年生徒作成)

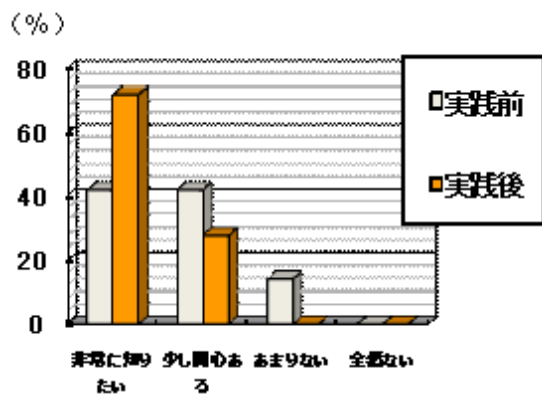


図15 「渡名喜のことをもっと知りたいですか」という問いへの生徒の意識の変容 (アンケートから作成)

信にあふれていた。活発に意見の飛び交う、有意義な中間報告会となった。

5) 調査のまとめ (11時間目・12時間目)

中間報告会を受けて、補足的に調査をおこない、主題図に情報を付け加えた。最後に各調査から見えてきた渡名喜集落について、どんな特色があるかをみんなで話し合い、まとめとした。

IV 実践のまとめ

1. 授業後の生徒の変容

今回授業実践をおこなった渡名喜中学校1年生7名を対象に、アンケート調査を実施した。「身近な地域(渡名喜)のことをもっと知りたいですか」という質問の答えを授業実践前と後で比較したのが図15である。図15からは、「渡名喜のことを非常に知りたい」と思う生徒が、授業前の42%から授業後は71%と急増していることがわかる。「非常に知りたい」「少し関心がある」を合わせると、100%の生徒が「渡名喜島のことを知りたい」と考えていることがわかる。身近な地域のことをもっと「知りたい」という、身近な地域への関心が全体として高まっているといえる。

また、生徒が学習中に考えたことや単元の学習を終えての感想を生徒自身が記したフィールドノートを基にまとめたのが、表4である。表4をみると、渡名喜集落に対しては「いつもきれいにされている」「伝統建造物を守ろうとしている」「ソーンジャキがきれい」「海が豊か」など、身近な地域への新たな発見や再評価の表現が並んでいる。身近な地域への理解と関心の高まりを示しているといえよう。

地図活用についても、全体として楽しく学習できたようすがうかがえる。「地図に描いてあることをもっと確かめたい」とさらなる学習意欲につながっている

表4 生徒の渡名喜に関する意見や学習を終えての感想

■「渡名喜」集落に関すること
<ul style="list-style-type: none"> こんなにフクギが多いとは思わなかった 珊瑚礁が広く広がっていて、海が豊かだと感じた 屋敷がいつもきれいにされている ソーンジャキがきれいで渡名喜の自慢 みんな伝統建造物を守ろうとしている 石敢當がこんなにあるとは思わなかった
■地図の有効的な活用に関すること
<ul style="list-style-type: none"> 地図にいろいろな情報が描かれていることがわかった フィールドワークが楽しい 地域調査はとても楽しかった 地図に描いてあることをもっと確かめたい 『私の渡名喜MAP』をみんなで作ったのは楽しかった 地図に自分の調査をまとめるのは難しかったが、色を塗ったり、写真を貼ったりして楽しくできた
■言語活動に関すること
<ul style="list-style-type: none"> みんなの中間報告がとてもすごくて、話を聞いているだけで楽しかった 地域の方が褒めてくれたのは、うれしかった 自分の調査について、友達がいろいろとアドバイスをくれるのはうれしかった 中間報告会はとても緊張したがみんながよく聴いてくれて良かった

(生徒のフィールドノートを基に作成)

ことがわかる感想もあった。言語活動についても、おおむね肯定的にとらえた感想が多い。「地域の方が褒めてくれたのは、うれしかった」「友達がいろいろとアドバイスをしてくれるのはうれしかった」などのように、言語活動の良さを生徒たちが実感として感じているようすがうかがえる。地図の有効的な活用や言語活動が、単元の学習に良い効果をもたらした、その結果、生徒の「身近な地域への理解と関心が高まっている」と考えることができるのではないかと。本稿で取り組んだ「地図の有効的な活用」や「言語活動を意識した学習活動」は、「身近な地域の調査」の単元において、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深め、地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けるために有効であったといえる。

2. 実践の課題

本実践の課題として次の3点をあげたい。

- ①さらに充実した地域素材の教材化を図る
- ②フィールドワークの際の健康・安全面の対策、調査活動の安全管理
- ③さらに充実した地図を効果的に活用する学習の推進、言語活動の推進

V. おわりに

本実践は全12時間の社会科の実践である。授業のどの場面においても生徒がいきいきと、目を輝かせて「身近な地域」の調査活動やフィールドワークに懸命に励んでいたことが、とても印象的であった。沖縄の夏の暑い最中を、フィールドノートと水筒を片手に歩き回る生徒たちは、空の青さと山の緑と白い砂地と赤瓦の家が織りなす島の原風景に重なって、たくましく、そして頼もしく見えた。自分の調査内容について原稿も見ずに堂々と発表していたことをみても、生徒たちの身近な地域への理解と関心はやがて、「この島に生まれて良かったなあ」という島への愛着や「私はこの島で育ったんだ」という島に住んでいることへの誇りにつながっていったのだと考える。私たち社会科教師が教材研究を重ね、丹念に地域素材を教材化していくことの大切な意義のひとつはここにあるのではないか。郷土への思い、愛着や誇りが、生徒たちの自信や自己肯定感を生み出し、変化の激しい国際社会の中でも、自分を見失うことなくしっかりと生きていく力になると考えるからである。本授業実践を生かし、今後も地域に関心を持ち、地域に主体的に生きる生徒の育成を目指し、授業研究に努めていきたい。

本授業実践を行うにあたり、渡名喜島の多くの方々に教材研究の調査や情報提供をはじめ、さまざまな形でご協力をいただきました。また、生徒たちの調査や取材では、質問にも快くお答えくださりました。たいへんお世話になりました。深く感謝いたします。中間報告会では、渡名喜島在住の上原健徳氏、仲里美智子氏、上原進氏には教室までお越しくださり、授業にも積極的にかかわってくださりました。同じく渡名喜島在住の桃原又一氏にも、特に島の風俗文化等についてご教示いただきました。渡名喜小中学校の上原雅志校長をはじめ、渡名喜小中学校の先生方にもさまざまなご指摘やアドバイスをいただきました。心よりお礼申し上げます。なお、本授業実践の骨子は、沖縄地理学会主催の第4回地理教育シンポジウム(2008年、於琉球大学)にて報告した。

(受付 2010年5月10日)

(受理 2010年6月16日)

注

- 1) 2008年6月現在の生徒数である。
- 2) 現在の「朝起き会」は、月水金の週3回、朝の6時30分からラジオ体操、縄跳び、ジョギング、集落内の清掃等の活動を行っている。大正時代からの長年継続した取り組みは、平成12年に郵政大臣・日本放送協会から表彰、政府の公共広告機構で上げられ宣伝されている。また、平成19年度に沖縄県教育委員会から「児童生徒等表彰」を受けた。
- 3) 基本的には単元の指導計画の通りに授業実践を進めたが、「課題追究の段階」の個人の調査に入ると、計画した授業時間だけでは足りずに、フィールドワークを放課後におこなう場面があった。
- 4) 帝国書院資料編集部(2001)の『中学校社会科地理移行資料-地域調査マニュアル-』を参考に教材を作成した。
- 5) 渡名喜島在住の上原健徳さん、仲里美智子さん、上原進さんの三氏をお招きした。「渡名喜の子どもたちのために」という思いでご協力いただいた。
- 6) 筆者は平成20年度渡名喜幼小中学校校内研修計画に基づき、本授業(「身近な地域の調査」中間報告会:10時間目)を公開授業として授業実践をおこなった。その際、作成した指導案を一部修正したものが表3である。

文献

- 文部科学省(2008):『中学校学習指導要領』
- 文部科学省(2008):『中学校学習指導要領解説社会科編』
- 我那覇念(2003):情報化・グローバル化社会と地理教育. 沖縄地理, 6, 111-116.
- 西岡尚也(2006):小学校高学年における世界地図の教材開発—すぐに役立つ実践として—. 琉球大学教育学部紀要, 68, 97-106.
- 沖縄県渡名喜村教育委員会(1999):『渡名喜村渡名喜伝統的建造物群保存対策調査報告書』
- 沖縄県渡名喜村役場(2002):『渡名喜島ミニガイドブック』
- 渡名喜村立渡名喜幼小中学校(2010):『1か年の歩み(足跡第34号)』
- 帝国書院資料編集部(2001):『中学校社会科地理移行資料-地域調査マニュアル-』帝国書院